

「のっぺらぼう」への誘惑

— 集合霊の憑依と無名性への夢



稲賀 繁美

小泉八雲ことラフカディオ・ハーンの生前最後の著作『怪談』*Kwaidan*（一九〇四年）に収められた一篇に、「むじな」*Mujina*がある。これを原文で最初に読んだのは、中学二年生の夏休みのことだった。英語を学び始めて一年と半年足らずでは、いくらなんでも無理な宿題で、ずいぶん苦労した。キノクニ坂というのが、どこにあるのか、実際に存在するかどうかとも、田舎育ちの子供には見当が主人の顔が、目も鼻も口もない姿でこちらを振り返る場面は、いまに至るまで記憶に刻まれている。

あらためて原文にあたってみると、どうだろう。屋台の蕎麦屋の主人のせりふは“*He! Was it anything like THIS that she showed you?*”とあり、*cried the soba-man, stroking his own face — which therewith became like unto an Egg....* とハーンは続ける。大文字で「卵」とあるばかりで、「のっぺらぼう」も「むじな」も、この箇所原文には現れない。

1

「むじな」といえば一九二五年に大審院で被告に無罪が言い渡された「たぬ

き・むじな事件」も思い起こされる。この件では、被告が「むじな」と「たぬき」を別種の動物と認識していたことが、猟師を無罪とする根拠となった。法学概論などでいまだに一度は顔を覗かせる判例だが、これとしばしば対比させる判例に、その前年の「むささび・もま事件」がある。こちらは「もま」という方言の指す動物が「むささび」と同一であるのに、その「事実」を認知していなかったとして、被告に対して狩猟法違反の有罪判決が下っている。類似したこのふたつのケースには「事実の錯誤」と「法律の不知」とが錯綜を見せている——と

するのが法律家の解釈だそうだが、いかなるものか。前者の判決文には、こうあった。

「狸、びん貉はくの名称は古来並存し、我国の習俗此の二者を区別しいささか毫も怪まざる所なるを以て、狩猟法中に於て狸なる名称中には貉をも包含することを明にし、国民をして適てき帰きする所を知らしむるの注意を取るを当然とすべく、単に狸なる名称を掲げて其の内に当然貉を包含せしめ、我国古来の習俗上の觀念に従い貉を以て狸と別物なりと思惟し之を捕獲したる者に対し刑罰の制裁を以て之に臨むが如きは、決して其の当を得たるものと謂うを得ず。」

「たぬき・むじな」では、「貉」を「狸」に含めて括弧を法律条項に明記しなかった立法上の説明不備ゆえに、刑事罰の適用は不適切とされた。ところが「むささび・もま」では両者を同一と認識しえなかった被告の側の「事実の錯誤」の非が唱えられ、「法律の不知」す

なわち「法律を知らなかった」では理由にならない、という判断から有罪判決が下っている。両案件とも特定の名辞がいかなる指示対象を包含するかに関して、必ずしも社会的合意がなかった点は共通する。そのうえで、後者の「もま」も「もんが」の異称？は特定地域の方言に過ぎず、標準語化政策が邁進されていた当時にあっては、方言依拠は法律判断には馴染まず、不適切——とする暗黙の言語差別的前提が働いた、との解釈もあるようだ。だが「むじな」はどうなのか。捕獲対象物件の「取り違え」すなわち「事実の錯誤」ゆえに無罪と判断されたものだった——そう結論づけるので、よいのだろうか。

構造主義言語学は、名辞と指示対象とは恣意的に貼り合わせられたにすぎないと弁じる。ところが、これらの判例は、いまだに名辞と対象とが厳密に一对一に対応すべきことを前提としている。ソーシャルの洗礼を半世紀以上に通過した

(さなきだに Post-Truth を喧伝される)現在からみれば、これらの「判例」が依然として生き残り、「世界」を裁断している法律界の「言語観」こそが、奇異に映る。おまけに「たぬき」は人を化かすに長け、「むじな」には変幻自在の能力がある。「我国古来の習俗上の觀念」はそう認めていた。とすれば「狸」や「貉」といった動物の「種的自己同一性」の根拠はどこにあるのだろうか。

2

「のっぺらぼう」の伝承は日本各地に広くみられるようだが、そもそもなぜハインはこれに鋭くも感応したのか。これは筆者の憶測となるが、ここには優生学者フランシス・ゴルトン Francis Galton からの感化が無視できない。ゴルトンは犯罪学の分野でも功績を残すが、合成写真の実験でも知られている。犯罪者たちの顔写真を集め、それらを重ね合わせに焼き付けるとどうなるか。犯罪者特有の

狂暴かつ凶悪なる顔つきが頭わになるかと思いきや、むしろ反対に個々の特異な個性は相殺され、昇華されて、結果としての合成肖像は、いたって中庸かつ平凡な顔貌を呈したという。統計学でいう「平均値への回帰」だが、ゴルトン先生は、競馬での順位予想でも同様の番狂わせが生じることを立証したという。

アメリカ滞任時代からこのゴルトンの著作に関心を寄せていたハーンは、そこにハーバート・スペンサー『心理学原理』經由の知識を上乗せする。脳髓に蓄積された記録簿は、有機体が進化の過程で獲得した経験の集積だというわけだが、ハーンによれば日本の仏教徒の語る「前世」とは、このような「多重化された自我」に他ならない。現存する人格は「前世の面影」の多重像だが、それはもはや個別の名前を弁別することもできない先祖の霊の集合体として現象する。

霊の集合は、はからずもここで「無名性」を獲得する。「名無し」は表情に関

していえば「顔なし」faceless、固有の自己同一性を喪失した無性格な顔貌、目鼻口の区別をも喪失し、つるりとした無機質の「顔」が「無」として回帰を果たす。純粹な霊性は、誰彼と呼ばれるのを拒む「のっぺらぼう」な相貌を呈する。個性を払拭し、喜怒哀楽の感情も摩滅した「空」相、それが闇夜に繰り返し不意に出現する不気味さ……。

ハーンの脚注にはアナグマの一種である「貉」による悪戯、と簡略な注があるにすぎない。だがハーンが進化論や遺伝学に照らして想像を逞しくしていた「幽界」は、貉を霊媒として人に憑依し、八雲は口承伝承のなかに「無」の具現が息づいていた様に圧倒された。

3

こうした「名なし」の集合霊との癒着・融合は、文化伝承のなかで生起する。とりわけ詩的言語の彫琢にその現場を見出したのが、例えば哲学者の九鬼周

造である。言語とは皆で共有してもひとりひとりの取り分が減ることのないような特殊な財産だ、とは「実証主義」の父、オーギュスト・コントの観察だった。思えば子供は、親の世代までが蓄積した言語という共通財産を回復することで己が発話能力を培う。既存の言語環境は次の世代にあたかも憑依するかのようになり移る。さもなければ言語文化の伝承はありえない。九鬼は「既存を回顧して伝統の中に自己と言葉とを確実に捉える」と述べる。伝統への参入により自己が刷新される。具体的には古人の選別した「歌枕」に依り、祖先の残した詩句を暗唱し、その韻を諷んじて唱和する。そうすることで歌人・詩人は、母語の糧を自らのものとし、それらを回復することを通じて、その詩的共同体の一員へと成長を遂げる。

縁語や掛詞を反復し再循環させることは、死者の国の祖霊と交信し、その詩的体験に憑依されるとともに、祖先の魂を

現世に賦活させ、現勢させることに等しい。ここで九鬼はアリストテレスの用語を用い、潜在 dynamis を現勢 energeia に齎すという表現を動員する。それは九鬼の円環的時間意識に照らすならば、輪廻転生 metempsychosis であり、ストア学派の用語を用いるなら永劫回帰 palingenesis の実践と重なる。

このように詩的言語の再生作業では、過去と未来とが現在において垂直に融合し、ここに「永遠としての現在」が佇立する。それは過去の霊と一体化するといふ、憑依と忘我の境地でもある。押韻の朗誦や集団での暗唱、詩歌管弦の韻律は、脳をして容易に、脱魂や幽体離脱と形容される意識状態へと導く。

はつきり言って、九鬼の押韻論は危険思想である。実際、八年におよぶ欧州滞在から帰国して後の論考「日本詩の押韻」(一九三一年)で、九鬼はこの機構に、世界に喧伝すべき「言霊のさきはふ国」の真実を見出す。持田季未子はその遺著

『美的判断力考』(未知谷、二〇一九年)に収められたフランス語講演で、こうした三〇年代の九鬼の「変節」を指弾し、『いき』の構造』の著者が数年のうちにかかる退行を呈したことに慨嘆を表明する。だがはたしてそれは九鬼において断絶や退行だったのだろうか。むしろ九鬼自身

が一九二八年にポンティニーの哲学会議で講じていたフランス語版「東洋的時間論」の延長上に、こうした詩歌の円環回帰構造がそのまま現れてくる。その連続性にこそ、「危険」の核心があるはずだ。

4

押韻、歌枕、縁語いずれも、起源をなした具体的状況と固有名とを、その後の世代における反復のうちに喪失し、いわば集合霊の依代として、無名性を獲得する。「名なし」にして「のっぺらぼう」な符丁へと純化され、汎用性のある象徴へと昇華されることで、それは詩歌の共同体の絆を束ねる機能を、いやましに強

固なものとして己が身にまとう。能動態として自己主張するのではなく、決まり文句として受動態よろしく引き合いに出されるのが、逆説的にも有無を言わずに権威の根拠となる。それを印欧語族の古拙の態に存在した、いわゆる「中動態」に類比することは、けっして正確な比喩にはとどまるまい。むしろ発話行為にいかにか権威が宿るかを探る際に、看過すべからざる機構がここに発現する。

ここで説明不足を覚悟で注記しておく。ハンナ・アーレントは「全体主義」という「悪」がどうして跋扈するに到ったかの秘密、その「起源」を解き明かそうとした。そこで彼女は強要された同意(受動)をも自己意思の倫理的発現(能動)と強引に同一視した。ここには意図的な錯誤がある。だがその核心に巢喰っていた「謎」こそ、「無名性」ではなかったか。比喩を弄するならこれは「貉」に騙された狩人(受動)を「狸」捕獲(能動)容疑で逮捕するに等しい。だが「全体主

義」の脅威はその「のっぺらぼう」中動」性にこそ宿っていたはずだ。詳細は、稲賀(編)論集『映しと移ろい』(花鳥社、二〇一九年九月刊)をご参照願いたい。

5

「言霊」と呼ばれるものの「謎」もまた、この両義的な無名性と無縁ではあるまい。ここには国学の伝統が召喚されよう。ひとことで国学といっても、そこにはさまざまな学説がある。坂部恵は『仮面の解釈学』(東京大学出版会、一九七六年)で富士谷御杖の言霊論に独自の解釈を与えていた。御杖は「言のうち」に籠りて、活用の妙をたもちたるもの」に霊の働きを見た。「言霊」は「言語の道」が絶えた時にも「感通せしむる妙」を備えるとして、その「言表されぬ影」に坂部は注目する。他ならぬ「中動態」の「のっぺらぼう」である。

下手に言表によって心情を吐露し身を顕すと、災いを招く。だが詩歌によって

身を隠すならば、そこにとどまる霊が福をなす。これは本居宣長のように、ひとたび漢心を去れば、おのずと真心が発露するといった発想とは、きわめて異質である。土田杏村の「御杖の言霊論」に坂部は言及していないが、そこで杏村は「言霊とは、詞の外に所思の言はずして籠れる所をしらしめず神の霊(『万葉集燈』)とする御杖の定義を挙げ、「いはまほしき事をつつしむ」ことで「人の中心に潜める妖気」の災いを避ける技として、御杖が提起する「倒語」(さかしまごと)に論及する。「言挙げ」の「真言」(まこと)が無名性の裡に退却する「顕冥一如」の表裏、ここに、ほかならぬ「倒語」の逆理が成立する。それは祖霊に連なる詩歌の裡に身を隠すことで、「真言」と融解を遂げ、「受動」のうちに無謬の権威を宿し、不動の「能動性」を発揮する。

『古事記』の高天原勢力による葦原中国制庄の場面の発話構造には、こうした

神威発揚の魔術的言語の機制が痕跡として残存している。タケミカヅチがタケミナカタに自らの手を握らせる。その受け身の姿勢が、逆説的に彼に神威を授ける場面である。カザフスタン出身の神話学研究者、マラル・アンダソヴァさんは、シャー・マニズムとの関連でこれを見事に分析している(稲賀稿『図書新聞』三三五四号、二〇一八年六月九日付)。

6

受動に溶け込まされた能動の威勢。それは反復による個我的喪失と裏腹な、無名性の権威確立という機構とも、表裏一体で密接に関わっている。マックス・ヴェーバーからピエール・ブルデューに至る権力発生論の核心は、このあたりに隠されている。そのように筆者は想定しているのだが、これはまだ学会ではおよそ認知を得ていない異端な学説だろう。

だがそのあたりの機微に、それとなく気づいていた鋭利な藝術的知性のひとり

に、武満徹がある。武満の《閉じた眼》（一九七九年）は幻想の画家オディロン・ルドンの同名の作品に靈感を得たピアノ独奏曲だった。冒頭のモテイーフが楽曲全体を通して反復されるが、それは通常の「変奏」とは異なり、曲が進行するにつれ「減算的」に変容する。減衰のうちに痕跡と化し、ゆっくりと、「忘却」へと、無名への途を辿ってゆくかのよう

に。
清水徹は武満の発言から「宇宙を循環する水」という比喩を拾っている。ルドンは地上の樹木がそのありかを暗示する地下水脈から、様々な霊を呼び出した藝術家だが、武満はそのルドンに「太古の記憶」が漂う夢想を感じていた。ルドンが呼び覚ます亡霊たちには、過去の複数の記憶が重なっており、もはや誰ともわからぬ変容を遂げてゆく。個を超えた幾多の霊的存在との交感が、想起と忘却との振幅のなかに消長する。

武満は『夢の引用』で、夢に現れる形

象はひどく鮮明だが、それは言語では捉えがたく、物語的な繋がりや網を搔い潜り、曖昧で非現実性を帯びる、と語っている。管弦楽曲《夢の引用》（一九九一年）でドビュッシーの交響詩《海》（一九〇五年）の断片を引用しつつ、それを喪失途上の旋律に託した経験とも符合しよう。霊の想起は、忘却への希薄化と手を取り合って歩みを進める。

「忘却の断片」[ジャン・バラケ『ドビュッシー』]。その同一性失効のうちに、「のっぺらぼう」への道行きが辿られる。避けがたい摩滅と減衰に徒らに抗おうとするのではない。むしろ誰とも見分けがつかなくなる祖霊の姿に、すなおに寄り添おうとする。それは「眼を閉じて」はじめて感知できる世界だった。敢えて目視を試みれば、ノッペリとした卵殻のような、目鼻立ちも口もない「崇高」なる顔に会おう羽目となる。さもなくば、偽りの権威と化した「言霊」の幻影に憑き纏われるだけだろう。「のっぺらぼうの

奇妙な動物」に、意図せずして「夢のなか」で出会う僥倖を待つこと（司修『図書』二〇一九年七月号表紙）。

思えばルドンとハーンとは、精神的な隣人だった。二人の間にマルティニクに滞在したポール・ゴーガンを置いてみるがよい。ルドンと親交のあったゴーガンはブレイ火山麓の町サン・ピエールの往来で、面識もないまま、ハーンとすれ違っていた筈なのだから。タヒチのゴーガンを媒介とした、パリのルドンと東京のハーン。このふたりは、そうとも知らぬままに、地球の対蹠点にあつて、楕円軌道を描く遊星を司る、双数の焦点に位置していた。そしてかれらは、密かにふたりながら、「のっぺらぼう」な「谿」の夢想を育んでいたことになる……。

（いながしげみ・文化交渉史・

比較文学・比較文化研究）